

自己評価報告書

平成23年3月30日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2008～2011

課題番号：20530444

研究課題名(和文) ヴァーチャル化される精神とリアルな世界—視覚社会学の視点—

研究課題名(英文) Virtualized Mind and Real World: Point view of the visual sociology

研究代表者

北澤 裕 (KITAZAWA YUTAKA)

早稲田大学・教育・総合科学学術院・教授

研究者番号：20204886

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：社会学・社会学

キーワード：視覚社会学、ヴィジュアル・カルチャー、表象文化論、観光社会学、文化・社会意識、社会学理論、観光文化論

1. 研究計画の概要

「見る」行為は社会的にどのように構成されるのかの「視覚の社会的構成」と、「見る」行為が人や社会をどのように構成するのかの「社会の視覚的構成」という、相互に補完し合う二つの分析視点に立ち研究計画を進めている。「リアルな世界」を見る視覚行為の参与観察と「ヴァーチャルな世界」の調査を行い、見ることが社会的にどのように作り出されてゆくのかともに、見ることにより自己および社会がどのように作られてゆくのかの問題も取り上げる。

今年度は、視覚のあり方と「自己の構成」との関係性を「器官なき身体」の概念と関連づけ「身振り」を見ることの意義について考察を行った。この考察はリアルな世界を見る眼差し、とりわけ、ものを見ることに特化した観光の調査をかねておこなった。

われわれの視覚に対して、身振りが顕著な意味をなすのは「演劇」の世界においてであるといえ、演劇での身振りを考察することで日常生活での身振りを捉えることにした。この演劇における身振りの視覚的な内容を把握するために、リアルな世界に対する典型的な視覚のあり方を示す観光の分析をも兼ねて、インドネシア、バリ島の舞踊「レゴン・クラトン」およびパリ、ムーラン・ルージュでの「フレンチ・カンカン」の調査を実行した。これらの考察を通じて、まず、視覚とは「いまここ」を越え、現在という時空を超越する機能、あるいは、いまここを「代補」する役割を果たしていることを指摘した。次いで、アントナン・アルトー、ゲオルグ・ジンメル、ワルター・ベンヤミン、ロラン・バルトらの演劇論を検討し、演劇における科白と

身体とを比較しながら、言葉の修辞から「身体」の修辞への移行を論じ、身体」の修辞としての身振りを「反復」することの意義を明確にした。劇であれ日常であれ、身振りの反復や引用、あるいはそのアクセントやプロミネンスが身体並びに主体のその時その場の意味づけを行い、これに対する生き生きとした実際の視覚それ自体を作り出すことになる。

しかも、この反復とは同じ事柄の繰り返し、同一性の生成に留まることではなく、多様な「変様」を意味している。同一でありながらも異体を形成するこの実体は「器官なき身体」として規定することができ、視覚に訴える身振りとは、この器官なき身体の端的な事例であるといえ、この概念のもとで身振りを見ることを捉え、リアルなものとして眺められる観光文化の意義、変様と情念/主体との関連についての検討をおこなった。

2. 研究の進捗状況

リアルな世界を見る視覚に関してはかなりのデータを得ることができた。リアルな世界への視覚のあり方を検討しながら、徐々に、ヴァーチャルな世界を見ることに目を転じ、リアルとヴァーチャルとが界をなし「インターフェイス」を構成することで、ヴァーチャルな世界を見ることから、リアルな世界を見ることにどのような影響を与えることになるのかの考察に入る。前年度および前々年度に調査を行ってきたリアルな世界を見ることから、HP、ブログ、SNS、Facebook、YouTube、などに掲載された画像・動画、あるいは、iPhoneやiPad、Galaxy Tabといったスクリーンを見ることの検討を続けながら、両者が競合することによる

視覚上の感覚や認識の変化を捉える。

この検討に際しては、G. ドゥルーズが展開している先に示した「変様」という概念を念頭に置き、ヴァーチャルな世界やそこでの表象を見ることによって引き起こされる「可視的内省性」、自己の「視覚的再認」、体験の「可視的意味づけ」、「見られる事象の体内化」、また、ヴァーチャルな世界とリアルな世界とがインターフェイスにおいて、それぞれお互いを眺め表象ながら自らを視覚的に構成する「観相学的構成」の概念、および、ヴァーチャルな世界を見ることから生ずる「リアリティ退色」や「リアリティ延着」、あるいは、現前し見られている表象そのものにしか意味を見いだせない「超表象」における視覚の「現前完結」、仮説として今のところ立てている。これら仮説を考慮に入れながら、リアルな世界の視覚に対するヴァーチャルな世界を見ることの意味と影響、視覚と触覚などその他の感覚との関係を、実証的な調査の裏付けを得ながら明らかにして行くとともに、新たな概念の理論化をはかる。

3. 現在までの達成度

② リアルな世界に対する視覚の特徴をさまざまな観点から検討を加えることができた。ほぼ当初の目的を達成しつつあり、その研究成果の一部を下記の論文で示した。

4. 今後の研究の推進方策

最終年度は、リアルな世界を見る視覚とヴァーチャルな世界を見る視覚とが、交叉し絡み合うことによる「自己」の存在や「精神」のあり方、「社会」との関係を、「真正な自己」の姿と比較検討し、これらの世界に対する「視覚の意義」を総合的に解明して行く。この場合、ヴァーチャルな世界にアップされている画像や映像など、見ることのできる存在は、すべて、「ヴァーチャル化された精神」であるという仮定から考察を行う。ヴァーチャル化された精神は、可視的に開示されたものであるという意味で、「露出した精神」であり、この限りで、それはコントロールしやすく、またされやすい側面をもっている。しかしまた、この精神は、お互いにとって、今ここの自己とは異なる「他性」であり、リアルな世界において「他性」を見ることにより得られる「真正な自己」と関係することにもなる。このように、ヴァーチャル化された精神を相互に示し見ることが、どのような社会的な意味をもつことになるのかを考察する。

インターフェイスを介したヴァーチャルな世界を通じて手軽に「他性」に接しこれを見るのが常態化した現在、実際にリアルな世界のなかで他性を求め見ることの意義、このことと真正な自己の存在との関係を今回

の研究を通して考え直し、今までの研究を継続的に展開し分析を完成させるが、視覚とその他の感覚との関係もまた視野に入れ「主体」の構成の問題を検討してゆきたい。

5. 代表的な研究成果

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計3件)

- ① 北澤 裕 『『器官なき身体』への眼差し』、教育学研究科紀要、No.21、1~24頁、2011年、無。
- ② 北澤 裕 「凝視の廃位・観光のクリナメンと視覚のアウラ2-」、学術研究、第58号、1~22頁、2010年、無。
- ③ 北澤 裕 「<旅>を眺める・観光のクリナメンと視覚のアウラ1-」、教育学研究科紀要、No.20、19~42頁、2009年、無。